

食支援つうしん

—新宿食支援研究会通信—
第21号 2016.9.1発行

先日、ある管理栄養士から、地域の医師は、訪問栄養指導の指示書を書いて頂けないという話を聞きました。未だに訪問栄養が導入されにくい現状があるのだとわかり、何故だろうかと不思議に思いました。その理由はいくつか考えられ、何となく想定ができます。

私は、介護保険制度が始まってからケアマネとして従事していましたが、その頃から訪問栄養指導のサービスを何人かの利用者さんに導入していました。私は必要と感じたので訪問栄養指導サービスの導入を推進していきました。

今、私のクリニックの在宅診療部門で導入していることがあります。それはアセスメントです。患者さんに関わる全ての方が、その患者さんにどのようなサービスが必要かを評価するのです。もちろん栄養指導も入っています。医師や看護師、リハスタッフ、相談室と、それぞれの立場で必要と感じるサービスを評価します。実際に評価したサービスを導入させるわけではありませんが、気づくという点ではとても重要なことだと感じています。

気づくことは簡単にできるはずですが、「この人はちょっとおかしい」と思うことが気づきです。ちょっとしたポイントを知り、常にアンテナを張り、気づいたら専門職につなぐ。難しく考えず、すぐに行動に移していけば良いのです。ぜひそうしていきましょう！



(PT・ケアマネ 堀尾隆)

在宅総合ケアセンターの管理栄養士 第3回 在宅でのエピソード

最終回は、実際に訪問栄養指導で介入した方のご紹介をします。

その方は92歳の女性、息子と二人暮らし。認知症で、手引き歩行でトイレに行くことが可。近隣の娘から、食事量が少なく、体重減となっているのが心配とのことで、主治医より訪問栄養指導の依頼がありました。

明らかな嚥下機能低下はないものの、固形物は口から出してしまうため、介入当初は栄養ドリンクを飲む事で、ある程度の栄養が確保されていました。しかし、ご家族が「昔からご飯が大好きなので、お粥を食べて体重を増やせたら」と希望されたので、飲める位の全粥ペーストを作りました。すると、作った200gのお粥を一気に食べ、ご家族もビックリ！おそらく、お粥をお気に入りのカップに温かい状態で提供したことが良かったのでしょう。その後、家族に調理方法を教え、さつまいものポタージュなど、他のレパートリーも増やしていきました。

それから約2年半。作ったお粥を医師や看護師に持って行ってもらうこともありました。全粥を、とても嬉しそうに「おいしい」と言って食べた翌日、本人は旅立って逝かれました。後日、ご家族から「最期に大好きなお粥をお腹いっぱい食べて逝けたので本当によかった。悔いはありません。」という言葉頂きました。これからも、食の支援を通して、様々な人に寄り添いたいと思います。(管理栄養士 波多野 桃)

SKTS (最期まで口から食べるを支える会) 勉強会

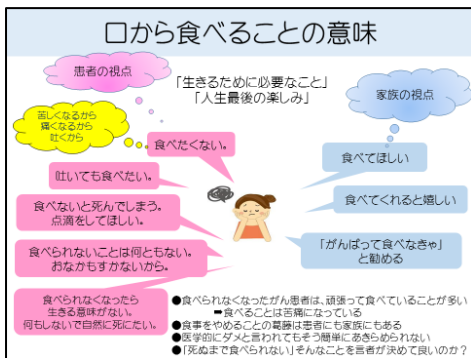
聖ヨハネ会桜町病院 聖ヨハネホスピス

大井 裕子

「がんの終末期に食べることの意味」を皆さんに考えていただくため話題を提供しました。ここで考えたいのがんの治療中ではなく、あくまで再発あるいは病気の進行によって、いよいよ人生の最終段階に差しかかったときの「食べること」の意味です。

この時期、がんの経過中に現れる症状の一つとしてすべての人に「食欲低下」が見られますが、体力が低下してきている時期と重なるため、「食べたら元気になる」「食べないから体力が低下している」と考えられがちです。

食も細くなり体力が落ちてきたときに、周りのご家族



が「少しでも食べてほしい」という気持ちは当然のこととして理解できます。しかし、一方で、「その気持ちに応えたい」「食べたら元気になるかも」という気持ちで患者さん自身も一生懸命に、時には無理をして食べています。

この人がこの時期に「食べること」を楽しんだとしてもそうでないとしても、残念ながら残された時間は週から短い月単位で、「食べたい」という意欲は数週間後にはなくなってしまう。もしかしたら、まだ「食べる」意欲が残っているかもしれない

この大切な時期に、もし何らかのきっかけで「食を楽しむ」ことができるようになったら、それは患者さんにとってもご家族にとってもとても貴重な時間になるでしょう。食べなきゃいけない、でも食べられない。頑張って食べている。この状況が続くと、その人にとっての「食べること」は楽しみでしょうか？あるいは苦痛になっていないでしょうか？もし、苦痛になっているとしたら、私達には何ができるのでしょうか？

食べるのがつらいと思っているのに、専門家がそろってどうやったら食べられるかを考える状況を想像してみてください。「食べられたら100点」ではない状況もあるということをお忘れしないでほしいと思うのです。1週間ごとに体調が変化する時期です。時間をかけずに「食を楽しむモード」にシフトできるとしたら、即実践してみたいと思いませんか？

「頑張って、無理をして食べている」人が、「無理に食べなくても良いよ」というひとことで気持ちが楽になる可能性も知ってほしいと思います。食べ物を見るのも嫌と言う人にはいったん食事を止めて『『ごはんとおかず』にこだわらずアイスクリームでも良いですよ』、『『食べたいものを食べたいときに』で良いですよ』と言う関わり方に変えてみ

ます。数日後、ちよつと食べたくなってきましたと笑顔になり、ご家族に好物をリクエストされ、ご家族と一緒に食事を楽しむことができるようになること、その結果としてほんの少し食べられる量が増えることもホスピスではしばしば経験します。

